

この世界の宇宙の色は黒ではなく、青かった。  
どこまでも広がる青い宇宙。人類はこの青い宇宙のさまざまな場所で暮らしている。

そんな青い宇宙のあちこちにあるアステロイドベルト宙域……大小いろいろなサイズの小惑星が集まってベルト状になっている宙域。  
そこを一隻の小型宇宙船が飛んでいた。

ゆっくりと青い宇宙を飛んでいる小型宇宙船。その小型宇宙船に乗っている者たちは、このまま何事もなくアステロイドベルト宙域を抜けることができると思った。  
そのときだった。大きめの小惑星の陰から、なにかが姿を見せた。

それは大型の宇宙船だ。船体に青い星のエンブレムが描かれている大型宇宙船。

突然として姿を現した大型宇宙船には、武装が施ほされていた。

二基ある二連装のビーム砲、そのうち一基が小型宇宙船を狙う。そして、ビームが小型宇宙船に向かって飛んだ。

小型宇宙船の三つあるメインエンジンのうちの 하나가、ビームによって破壊される。

大型宇宙船のビーム砲は、連続してビームを放つ。小型宇宙船の破壊が目的ではないようだ。  
放たれるビームが小型宇宙船に直撃する様子はない。ビームは船体をかするだけだ。

青い星のエンブレムが描かれている大型宇宙船は、宇宙海賊の船……宇宙海賊船だ。  
小型宇宙船を狙っている理由は、捕まえて積んでいる荷物をいただくためである。  
そのため、小型宇宙船を破壊するつもりはなかった。

少しずつダメージを受けていく、小型宇宙船。小型宇宙船は宇宙海賊船に捕まる気はない。  
まだ無事なメインエンジン二基を全開にする。小型宇宙船は大型の宇宙海賊船から離れる。  
そして、そのままアステロイドベルト宙域からも抜け出す。

宇宙海賊船は深追いはしない。宇宙海賊船は、小惑星の陰に隠れた。

小型宇宙船は大きなダメージを受けながらも、どうにか宇宙海賊船から逃げることにできた。

◇◇◇

青い宇宙に浮かぶスペースコロニーの一つ。その内部にある街の通りを、一人の男が歩いていた。

見た感じ二十五歳くらいの、身長が百八十七センチはある青年だ。

黒髪に黒い瞳、そして黒一色の服装……開襟かいきんシャツもズボンも、そしてロングコートに指ぬきグラブとブーツも黒というもの。

腰に巻いたベルトも黒で、ベルトの左側にはホルダーが付いており、一本の長剣が差されている。

正確には長剣の形をしたものだ。それには刃が付いていない。人を斬ることができない。

黒一色の青年……ダグラス・フォッカーが歩いている通りの先には、一軒の酒場があった。スペースコロニー内の時間はまだ昼間だが、酒場からは騒がしさが漂ってきている。

ダグラスは酒場の中に入る。

酒場の一角に、大勢の男たちが集まって酒を飲んでいた。他に客の姿はない。酒を飲んでいる男たちは皆、見るからにガラが悪かった。

ダグラスは男たちが集まっている方に歩こうとする。酒場のマスターが止めようとするが、ダグラスは片手でそれを制して歩き続けた。

昼間から酒を飲んで騒いでいる集団の一人が、歩み寄ってくるダグラスに気づく。

その男はダグラスに、

「なんだ、お前？」

と問いかける。

「賞金稼ぎだよ」

男の問いかけに、ダグラスはそう答えた。

答えを聞いた瞬間、騒いでいた男たちが静かになる。全員の顔がダグラスに向く。

「レッドスカル宇宙海賊団、お前たちを捕まえに来た」

男たち……レッドスカルという宇宙海賊団のメンバーたちは一斉に立ち上がり、腰や肩に装着したホルスターから拳銃を抜いた。

メンバーの数は十人以上……十個以上の銃口がダグラスに向く。

多数の銃口を向けられても、黒一色の青年は平然としていた。

「デッド・オア・アライブ……生きていても死んでも関係ない」

ダグラスはいたって冷静な口調で言う。

「死んでいても賞金はもらえるんでね」

「死ぬのは、てめえだっ！」

宇宙海賊の一人が拳銃のトリガーを引く。高温の熱エネルギーが衝撃波と一緒にあって、銃口から光線となって射出される。

拳銃はブラスターと呼ばれる武器だ。

高速で飛ぶ熱光線……トリガーを引いた男は、ダグラスが熱光線に貫かれて倒れると思った。

だが、現実とは違った。高速で飛ぶ熱光線を、ダグラスは上半身をヒョイツとひねって避けた。

「なにっ！」

ダグラスを狙ってトリガーを引いた男は驚く。

男が驚いている間に、ダグラスはベルトのホルダーに差されている長剣の形をしているものを素早く抜いた。

すると、刃のない刀身が金色の光……高温のプラズマで覆われる。

「ムラサメ！」

宇宙海賊の一人が、ダグラスが持つ武器を見てそう叫んだ。その間にダグラスは長剣状の武器……ムラサメと呼ばれる武器を振っていた。

彼にブラスターの銃口を向けてトリガーを引いた男が、大きな悲鳴を上げる。その男の右腕は、肘から切断されていた。

高温のプラズマで覆われた刃のない刀身が、男の腕を切断したのだ。

ブラスターを持った男の右手が床に落ちる。

右手を切断されて悲鳴を上げている男は、高温のプラズマで覆われた刀身で胸を貫かれた。た。

刀身が胸から抜けると、右腕を失った男は倒れ、そのまま動かなくなる。

「こいつサムライだ！」

宇宙海賊である男たちは、ダグラスを狙ってブラスターのトリガーを連続して引いた。

多数の熱光線をダグラスは避け、あるいはムラサメの刀身で受け止めて防御する。熱光線は一発も、彼に当たることはなかった。

ダグラスは宇宙海賊の一人に接近し、ムラサメを振る。その宇宙海賊は、反応することができなかった。ダグラスの動きが速かったためだ。

ムラサメが振られ、切断された宇宙海賊の頭部が宙を舞って、そして重たい音を立てて床に落ちる。

首から上を失った体は、思い出したように倒れた。

ダグラスがムラサメを振るたびに、宇宙海賊である男たちが一人また一人と倒れていった。

黒一色の青年ダグラスは、体内にミスリルと呼ばれる特殊な物質を移植したことで超人になった人間だ。

常人の倍以上の身体能力と五感、そして反射速度を持ち、ミスリルが生み出すエネルギーをプラズマに変換して自在に操る超人サムライ……それがダグラスであった。

ムラサメはサムライが使う武器だ。かなりの重量があり、その重量とプラズマの熱で敵を斬り倒す武器……それがムラサメだ。

ダグラスはさらに宇宙海賊を一人、ムラサメで斬り倒す。  
残るのは一人となった。

最後の一人である宇宙海賊はダグラスに背を向け、逃げようとする。  
それよりも速く、ダグラスが動く。瞬時に宇宙海賊の前に移動し、ムラサメを突き出す。

間近で高温のプラズマの熱を感じ、

「ひっ！」

と短い悲鳴を上げる宇宙海賊。

「部下は殺しても問題ないんだが……」

ムラサメを宇宙海賊に突きつけ続けながら、ダグラスは言う。

「ボスは生きてそのまま捕らえると賞金の額が上がるんだよ」

そんなことを言う黒一色の青年の整った顔に笑みが浮かぶ。

「生きてそのまま捕まってくれないか？」

ダグラスにそう言われ、最後の一人である宇宙海賊……レッドスカル宇宙海賊団の団長である男はブラスターを捨て、両手をあげて降参のポーズをとった。

有料販売小説 (R18) 【アオイノベル】へ

幻夢図書館 トップへ